

超越的な原理に基づく知識形態に対するE・H・カー の批判的視座：カー著伝記作品『バクーニン』にお ける静的な一元性に対する批判的考察

河村，しのぶ
元九州大学大学院法学府博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7167110>

出版情報：総合文化学論輯. 19, pp.21-40, 2023-11-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。



超越的な原理に基づく知識形態に対する

E・H・カーの批判的視座：

カー著伝記作品『バクーニン』における静的な一元性に対する批判的考察

河村　しのぶ

はじめに

本稿は、20世紀を代表する英国の思想家、E・H・カー（Edward Hallett Carr, 1892-1982）による第四の著作である伝記作品『バクーニン』（1937）を研究対象とする。この著作は、『ドストエフスキー』（1931）、『浪漫的亡命者たち』（1933）、そして『カール・マルクス』（1934）と続く、カーが著した一連の伝記群の最終作品であり、国際政治学が誕生した書籍と一般的にみなされてきた¹『危機の二十年』（1939）出版のわずか二年前に上梓された。

本稿の目的は、伝記『バクーニン』とはバクーニンの一元的思考様式とそれに伴う陥穽に着目することにより、人間の思考と知識の相対性と仮設性に照射するために書かれた、超越的な原理に基づく知識形態に対する痛烈な批判を具現した著作であることを証明することにある。超越的な原理に基づく知識形態とは、「時代や地域による差を考慮しない、一元的かつ絶対的とされる原理に基づく考え方」とここでは定義する。

また本稿は、1930年代のカーの思想において、一貫性はあるのかという問題関心の下に検討されてきた、拙稿三論文（河村 2022a、河村 2022b、河村 2023a）の続編に位置する論考である。既述の本稿の目的を論証することによって、1930年代というカーの初期の思想形成期において、超越的な原理に基づく知識形態に対して、批判的視座が一貫して存在していたことを明らかにすることが可能になった。

以上のことを論じていくために、本稿では、第一に、カーによる伝記作品である他の三著作との相違点として、カーが、伝記作品の主人公バクーニンの思想を検討する際に、バクーニンの著作物を一次資料として、ほとんど使用していないことを指摘する。このことにより、他の三作の伝記作品における主人公たちに対してとは異なり、カーはバクーニンの思想に深い関心を抱いていないことを論じる。

本稿は、第二に、なぜカーがバクーニンの思想に関心を抱かなかったのかという理由を検討する。このことを明らかにするために『バクーニン』作品中において、カーが強調する以下の二点のバクーニンの思考様式に着目する。

¹ 西村邦行『国際政治学の誕生—E・H・カーと近代の隘路』昭和堂、2012年を参照。

それらは、第一に個人主義的独裁とニヒリズムであり、第二に破壊に次ぐ破壊をリアリティとするバクーニンの現実主義観である。これらのバクーニンの思考様式は、ドストエフスキーの二元論的性質の対極に位置する、一元性と絶対性に起因するとカーは捉えている。

本稿の構成は以下となる。本稿は、序としての「はじめに」、「Ⅰ．問題の所在」、「Ⅱ．史料の扱い方とプロットの選択方法」、「Ⅲ．バクーニンの一元性と絶対性」、「結語」の順に構成されている。第二章である「Ⅱ．史料の扱い方とプロットの選択方法」は、「1. 史料の扱い方」と「2. 選択されたプロットの相違」によって構成されている。

さらに、「Ⅲ．バクーニンの一元性と絶対性」も、二節から成り立つ。それらは「1. 個人主義的独裁とニヒリズム」、次いで「2. 破壊と現実主義」の順に展開される。

以上、「はじめに」として、本節の構成までを述べた。以下からは先行研究に言及しながら、本稿の問題の所在について検討する。

Ⅰ．問題の所在

本章においては、先行研究を検討しながら、本稿の問題の所在を以下に明らかにしていくこととする。

バクーニンについての伝記研究は、マックス・ネットラウ著『バクーニン伝』全三巻に始まる（左近 1973、246 頁）。ネットラウは、この大著のほかにも、翻訳され広く流布している、活字版『バクーニン伝』や『バクーニン略伝』を著しているが、左近は、「質的にもまたその規模においても、これを凌駕するバクーニン伝は、わずかにスチュクロフの物を除いては、今に至るも存在しない」と評している（左近 1973、246 頁）。

2023 年現在までに、約二十冊以上のバクーニンに関する伝記が上梓されているようである²。

それらのほとんどのバクーニン伝において、ミハエル・バクーニン(Michael Bakunin, 1814-1876)は、世界中のアナキズム研究者たちの英雄である。

一例をあげると、H・M・ピルーモヴァは、彼の『バクーニン伝』の第一章の冒頭を以下の言葉を用いて幕を開けている。

² 筆者は、アナキズムの専門家ではないため、または筆者の調査力の不足と至らなさから、誤りがある場合にはご教示いただけると幸いである。

バクーニンは、多くのことで責められるべきであり、また罪深い男であるが、そのすべての欠点をうめあわせるものが彼にはある。それは、彼の精神の奥深くに潜む永遠に躍動する活力の源泉だ（ピルーモヴァ 1973 [原著：1966]、11 頁）。

すなわち、物語の序開において、バクーニンのすべての罪悪、過失、無法さの極致は、彼の精神性の神聖性の前では、些末なものであるとピルーモヴァは語っている。

これは、1960 年代、70 年代のバクーニン像であるが、現代の我が国においても、バクーニンに熱心な関心を寄せている研究者もいる³。

しかし彼らはアナキズムの研究者であり、カーの文学的研究領域と国際政治学的研究領域の思想を研究することを主眼に置いていない。

カーの文学的研究領域と国際政治学的研究領域の架橋という観点から、カー著『バクーニン』を研究しているものに、西村邦行による 2010 年に発表された論文と 2012 年に上梓された『国際政治学の誕生—E・H・カーと近代の隘路—』という書籍がある。それらは、人間の非合理性に焦点を当てて、『バクーニン』をテキスト分析し、研究をしている。

その一方で、本稿は、下記の観点からカーにおけるバクーニンの影響を紐解いていきたい。

すなわち、超越的な原理に基づく知識形態に対してカーが抱いた批判的視座という観点から、バクーニンにカーがどのように刺激されたのかについて検討していきたい。

カーの初期の思想形成期である 1930 年代、ドストエフスキーとの邂逅により、カーはそれまで彼が「育まれたリベラルな道徳的イデオロギーがいつも考えていたように現代世界で当然視される絶対的な存在ではなく、特権的集団の外部に住んで非常に異なった目で世界を眺める極めて知的な人々によって、鋭くまた説得力のある攻撃を受けていたことを初めて知った」のであった（カー 2002、55 頁）。

先述のように、本稿は以下の拙稿三論文の続編にあたる。それらは第一に、「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：『ドストエフスキー』と『危機の二十年』の共通点として」（以下、河村 2022a）である。そして、第二に、「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：『浪漫的亡命者たち』において」（以下、河村 2022b）である。そして、第三に「超越的な原理に基

³ 長崎大学多文化社会学部の森元斎准教授の著作を参照。『アナキズム入門』ちくま新書、2017 年、など。

づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：カー著伝記『カール・マルクス』における『資本論』に関するカーの議論を基に」(以下、河村 2023a)である。

これらの論文において、上述の河村 2022a では、カーの処女作『ドストエフスキー』と『危機の二十年』には、超越的な原理に基づく知識形態に対してカーが批判的視座という共通項を持っていることを論証した。

より具体的に述べるとするならば、それらの共通点とは、カーが人間の思想と知識の仮設性を指摘し、善悪の普遍性に疑義を呈したことであると言える。

先のカーからの引用の通り、ドストエフスキーの人生と彼の作品との邂逅により、カーを育んだ西欧で一般的に確信されているような価値観は絶対的なものではないことにカーは気づいた。すなわち、普遍的な良否は存在せず、善悪は絶対的なものではないとカーは考え始めた。

このような絶対的な善悪に対する疑義は、『危機の二十年』におけるドイツに対する理解のあるカーの姿勢と共通していることを指摘し、カーが超越的かつ絶対的な知識形態に初めて疑義を抱いた過程を、河村 2022a では示した。

続いて河村 2022b では、カーの考えるところの、人間の思考と知識の仮設性をさらに掘り下げた。その稿においては、浪漫的知識人たちが、「普遍的な愛」と謳われるものに対する理想を追えば追うほどに、その理想と現実の乖離に悲劇的に翻弄されていくというカーの描写を詳細に分析した。それにより、理想とされていることも、決して絶対的なものではないというカーの視点を明らかにした。『浪漫的亡命者たち』からも、『ドストエフスキー』の研究過程においてカーが衝撃を受けた、理想と現実という二元性の重要性に関する論述が多々認められた。その結果、この論文でも、やはり結果として、超越的な原理に基づく知識形態に対するカーの批判的視座を明らかにすることとなった。

そして、河村 2023a においては、『資本論』のマルクス議論を検討したカーが、マルクスの知的営為とその思想が、特定の時代や地域の産物であるという指摘を明らかにしていることを主張した。したがって、当該論文は、人間の思考と知識とは、仮設的な性質を有していると、カーが考えていたことを明らかにした。それにより、河村 2023a は、時代や場所を越えて普遍的な、換言すると超越的な原理に基づく知識形態に対するカーの批判的視座を示した。

以上の研究により、拙稿三論文では 1930 年代のカーの四作品である『ドストエフスキー』、『浪漫的亡命者たち』、『カール・マルクス』、『危機の二十年』には共通して、超越的な原理に基づく知識形態に対してカーが批判的であったことを明らかにしている。

この1930年代に共通するカーの視点は、『バクーニン』にも存在し、1930年代のカーの思想に一貫して、この絶対的一元性に基づく原理から生まれる知識形態にカーが批判的であったことを明らかにしたい。

このことを論証するために、次章からは、他の作品三作と『バクーニン』においての史料の使い方の違いを検証することにより、カーがバクーニンの思想にはあまり関心を持っていなかったことを明らかにしていく。先述のように、そのため第一に、この著作全体を通じたカーによる史料の採用の仕方を検討する。

以上、先行研究を検討しながら、本稿の問題関心を明らかにした。

次章からは、テキストの分析に基づき、以上の論点を明らかにしていく。

II. 史料の扱い方とプロットの選択方法

1. 史料の扱い方

本節では、カーによる史料の扱い方に着目し、他のバクーニン伝の著者と史料の扱い方を比較しながら検討を行っていく。

左近毅による、詳細なバクーニンについての伝記作品の系統の論考においては、カーの『バクーニン』伝は時系列的に第十三番目に挙げられている（左近 1973、250頁）。

左近はカーの著した『バクーニン』を次のように評している。

闊達な筆と想像力によってバクーニンの人間的魅力をみごとに描き出しており、一個の文学作品ともなっている。本書を通じてバクーニンの魅力を発見した読者は少なくあるまいと思われる（左近 1973、252頁）。

左近がバクーニンの「人間的魅力」とその「文学作品性」に言及し、称賛していることは、本稿の後の議論にとって非常に重要になってくる。

西村邦行による研究においても、また、カーの最後の弟子であったジョナサン・ハスラム(Jonathan Haslam)によるカーについての伝記である『誠実という悪徳』(2007 [原著:1999])でも、カーはバクーニンに強く惹かれ、バクーニンを書くためにこそ、マルクスについての伝記を書いたと記されている。現に、カー自身が、『自伝的覚書』(2002)の中で、以下のように述べている。

ドストエフスキーとゲルツェンを徹底的に研究したのち（つまり彼らに関する本を書いて）私は、おそらく西欧社会に対する最も全面的な拒絶を体現した人物として、バクーニンに魅力を感じるようになった（カー 2002、56 頁）。

以上のように、確かにカー自身がバクーニンに魅力を感じるようになったことを述べており、その意味において、既存の西村やハスラム等の研究は正しい。しかし、カーはバクーニンに対して、どのような魅力を感じていたのであろうか。この点について、カーは次のように述べている。

私は、バクーニンをモデルにした無法で派手な登場人物が、因習的なイギリス人集団に対して与えた衝撃を主題にした小説を書きさえした。この思いつきは、良かったが、出来ばえの方は貧弱だった⁴（カー 2002、56 頁）。

すなわち、カーは、西欧を拒絶するバクーニンの「無法で派手な」人物性に魅力を感じ、惹かれたのである。換言すると、カーがドストエフスキーとの邂逅後に得たような、より広い視座の対極にある、因習的なイギリス人に衝撃を与える方途として、カーはバクーニンに魅力を感じたのであるといえよう。

それでは、そのような意味での魅力を持つバクーニンの思想は、果たして思想としてもカーにとって、魅力的であったのであろうか。カーにとって、バクーニンの思想は、アナキズム研究者たちと同じように、共感と尊敬に値するものであったのだろうか。

本稿は、カーにとって魅力的であったのは、バクーニンの強烈な「無法で派手な」人格であり、彼のアナキズム的側面を含む思想自体ではなかったと考える。であるからこそ、左近の評したように、闊達な筆致によるバクーニンの人間的魅力に対する文学的作品としての評価は高くとも、大沢正道の決定的な指摘にあるように、カーは「アナキズム系で刊行されたバクーニンに関する史料はあまり利用」していない。

カーがこの著作を書く上で最も利用している史料は、バクーニンの書いた書物ではなく、「ソ連の歴史家 Y・M・ステクロフの編集した選集や彼の書いた伝記である」と大沢は指摘している（大沢 2013、687 頁）。

大沢は、カー著『バクーニン』に対するシカゴ大学の B・F・ホスリッツの批評が的を射ていると思われると述べ、以下のように紹介している（大沢 2013、686－689 頁）。

⁴ カーは数年後、その小説を破棄している（カー 2002、56 頁）。

バクーニンの潜在的な読者たちは、1937 年以来エドワード・H・カーの分厚い伝記『ミハエル・バクーニン』をいくらか参照できるようになった。しかしカーの労作の有効さはきびしく限られている。というのは、それはバクーニンの思想よりはほとんど彼の生活の実際の事件だけを取り扱っているからである。バクーニンについての思想的な伝記を書くまいというカーの明白な意図は、人によってはバクーニンの最大の、最も円熟した著作とみなされている『国家主義とアナキー』にカーがふれることすらしていない事実のうちにはっきりと示されている（大沢 2013、686－689 頁）。

このように、カーはバクーニンの最も円熟した著作にすら触れていないのである。以上を鑑みたとき、カーはバクーニンの思想には共感していなかったが、彼の生き様に惹かれていたということがいえるであろう。

カーがバクーニンについて、思想的な伝記を書くまいとしていたというホスリッツの指摘は、次のような事実からも妥当であるといえる。

カーは、『ドストエフスキー』、『浪漫的亡命者たち』『カール・マルクス』という他の三作の伝記作品執筆時においては、それらの著作の登場人物が書いた書物を一次資料の史料としてふんだんに引用している。バクーニンと対立関係にあり、そして、バクーニンについての伝記を書くためにこそ引き受けた、『カール・マルクス』においてでさえ、カーはマルクスの著作を綿密に分析し、批判と検討を行っている（河村 2023a）。カーは『カール・マルクス』という自身の著作を、のちに『バクーニン』の出版の「誘惑に負けて」しまった、「ばかげた企てであり、ばかげた本を生み出した」とさえ回顧しているほどであるにもかかわらずである。

一例を挙げることにする。

マルクスの著作である『資本論』における労働価値論という理論をカーは以下のように要約している。

凡ゆる商品の価値は、その製品に加えられた労働の量、すなわち労働時間数によって、測定されるものである。マルクスの言葉によると、商品は、価値の観点からすると、「凝結された労働時間の特殊な塊に外ならぬ」ものである（Carr 1934, pp.260-261：カー 1956、359 頁）。

このように『カール・マルクス』においてカーは度々、マルクスの言説を概念的に要約している。そして、これらの要約は、マルクスの原著を丹念に読み込まれたうえでなされていることが、マルクスの原文とカーの文章を照らし合わせると明白となるのである。上記の部分に該当するマルクスの原文では、以下のように記されている。

ある商品価値と他のそれぞれの商品の価値との比は、ある商品の生産に必要な労働時間と他の商品の生産に必要な労働時間との比に等しい。「価値としては、すべての商品は、一定量の凝固した労働時間に他ならない」（マルクス 2019、73 頁）。

以上からわかるように、マルクスの原文と対照すると、カーがマルクスの原文をしっかり読み込んでおり、それを基にカー自身の議論を展開していることが分かる。

それに対して、『バクーニン』においては、大沢の指摘にあったように、カーは史料の大部分をステクロフに依拠している。本稿執筆にあたり、筆者は以下のような簡単な調査を行ったので、ここで記すこととしたい。

『バクーニン』第一章では、19 か所ある註のうち、17 か所をステクロフの編著に依拠している。続く、第二章では、12 か所の註のうち、8 か所を同じくステクロフに依拠しており、第三章においては 10 か所中 10 の註、第四章では、7 か所中 4 つの註、第五章では、10 か所中 9 か所をステクロフの著作を註として使用している。

カー著伝記『バクーニン』において、バクーニンの思想に最もふれられている部分は第 31 章「マルクス対バクーニン」であるが、この章の註において最も引用されているのは、ジェームズ・ギョーム著『インターナショナル 記録と回想』（1905－1910）であり、この章の 17 ある註のうち、12 の註を占めている。それに続く、カーが二番目に最も依拠した史料は 17 か所中 2 か所の註となっている『K・マルクスと F・エンゲルスの著作集』（1928）となっている。このように、バクーニンの思想について最も詳細に書かれている章においてでさえ、カーはバクーニンの原著に、ほとんど依拠しておらず、触れていない。

以上、本節では、いかにカーがバクーニンの書いたものを史料として使っていないかを検討してきた。

以下からは、バクーニンについて著した別の著者たちと、カーが使用したプロットの違いに着目し、再び、カーがバクーニンの思想には深い関心を示していなかったことを明らかにする。

2. 選択されたプロットの相違

本節では、別の著者によって書かれたバクーニン伝をカーの著作とプロットに着目して比較検討していく。

カー著『バクーニン』において第 31 章「マルクス対バクーニン」が、カーがバクーニンの思想について検討しているおそらく唯一の箇所であるという本稿の見解は、大

沢によって、裏打ちされている。大沢は、カーの『バクーニン』伝において「カーがバクーニンの思想にややまとまってふれている個所は第31章「マルクス対バクーニン」の最後の説である」と論じている（大沢 2013、690 頁）。

別の著者によって書かれたバクーニンの伝記作品と比較すると、カーが費やしたバクーニンの思想に関する紙幅は、驚くほど少ない。

例を二つほど挙げてみよう。

「Ⅰ. 問題の所在」に挙げたピルーモヴァによる『バクーニン伝』の章立てを見ると、以下のような構成になっている。

すなわちそれは、第一章「『プレムーヒノの調和』よりヘーゲルのカテゴリーまで」、第二章「自ら自由なる人間となり、他の人々を開放すること……」、第三章「われわれと君たちの自由のために」、第四章「自由の値」、第五章「友情と同盟」、第六章「終わりとはじめ」、第七章「同盟」、第八章「バクーニンとネチャーエフ」、第九章「分裂」、第十章「晩年」そして最後に「むすび」によって構成されている。

これらの章の大多数がバクーニンの思想に深くかかわっているものである。

さらに、先述のカーの出典とは対照的に、ピルーモヴァによる『バクーニン伝』には、おびただしい量のバクーニン自身が書いたものからの引用があることに着目すべきであろう。第一章では、64 の註のうち、16 の註がバクーニン自身の著したものからの引用である。第二章では、64 の註のうち、35 の註がバクーニン自身の書物から引用され、第三章では、その数は 56 の註のうちの半分以上を占める 36 の註においてそうである。

我が国の研究者によって書かれたバクーニンの伝記はどうであろうか。勝田吉太郎による『バクーニン』（1979）にも、同様の傾向があり、この書においても、バクーニンの思想に関心の中心が置かれていたことは、以下の章立てを示すことだけで十分であろう。

勝田による『バクーニン』は、「1. 神と国家に対する反逆」、「2. 革命理論—マルクス主義との対比において」、「3. 権威主義的社会主義に対する批判」の三章からなる第一部により始まる。続く第二部は「バクーニンの生涯」であり、伝記的な要素が若干第一部より多いが、それでもバクーニンの思想を中心に描かれている。「Ⅲ. バクーニンの著作」と題された第三部は、その名の通り、バクーニンの著作についての検討がなされている。そして最後に、バクーニンという存在が現代に問いかける様々な論点、第四部「バクーニンと現代」に収められている。

以上のピルーモヴァと勝田によるバクーニンの伝記と比較した際に、カーの『バクーニン』において、いかにカーがバクーニンの思想的側面について検討を避けているかが明白となった。

カーはバクーニンに惹かれていたと明言しているにも関わらず、以上のことを鑑みると、カーは確かに、バクーニンの快活な無法さと、人を引き付ける派手な人格に惹かれていたといえよう。これは先述のカーの言葉にあるとおりである（カー2002、56頁）。

しかしながら、カーは、やはり、バクーニンの思想には、アナキズム的なものであれ、その他の思考様式さえ共感していなかったといえよう。

これは、ドストエフスキーというカーの1930年代の思索の原点と、バクーニンがあまりに対極的な思考様式を有していることに起因していると考えられる。二元性とその弁証法的止揚の重要性にカーを導いたドストエフスキーに対して、バクーニンはあまりに一元的な思考様式を持つ。つまり、カーにとってバクーニンとは、ドストエフスキーと対比されるべき、超越性や絶対性を体現した静的な一元性の好例であったのである。一連の伝記作品群の最後の著作として、『バクーニン』ではバクーニンの一元性に着目し、その陥穽を照らし出すことにより、人間の思考や思想の変異性と仮設的性質を浮き彫りにすることによって、超越的な原理に基づく知識形態に対する批判的視座を強調したのではないのであろうか。

以上、本節ではカーの採用したプロットをピルーモヴァと勝田によるバクーニン伝とを例として、比較しながら検討した。そして第一節と第二節を通じて、本章全体としては、史料の扱い方から、カーがバクーニンのアナキズム的な側面を含む彼の思想自体にはほとんど興味を持っていないことを明らかにした。

以下からは、カーがバクーニンの思想に関心を示さなかった理由として、カーから見たバクーニンの一元性を、カーのテキストにしたがって明らかにしていくことにより、超越的な原理に基づく知識形態に対するカーの批判的視座の存在を照射していく。

III. バクーニンの一元性と絶対性

1. 個人主義的独裁とニヒリズム

本章では、カーがバクーニンの思想に共感しておらず、前章に見たように、バクーニンの思想には深い洞察を加えなかった理由を挙げていく。その第一の理由として、本節では、これより、個人主義的独裁とニヒリズムについてのカーの主張を検討していきたい。

カーは、ドストエフスキーとの出会いにより、「二重性」の概念と邂逅し、その概念をいたるところで用いることを重要視し始めた（Lauer 2005）。

カーは、ヘーゲルとロマン主義の両方の影響を認めているものの、ドストエフスキーには「二重性」を一致させるという革新性があったと評価している（Carr 1931、p.198）。ドストエフスキーの二重性をカーは次のように要約している。すなわち、ドストエフスキーが強調する、人間の精神の中心にある二元論は弁証法的、つまりテーゼとアンチテーゼの統合によって特徴づけられ、それによって人類が真の統一を達成することができる高次の意識や人格へと向かっていくとカーは論じている（Carr 1931、p.198）。したがってカーの好む二重性、二元性の衝突によって推進されるダイナミックな世界においては、一元性と絶対性は忌避される。絶対的なものはありえず、絶対主義こそがカーの否定する存在論である。そのようなカーにとって、バクーニンの個人主義は批判に値する一元的で絶対的な思想であった。カーはバクーニンの個人主義について、以下のように述べている。

極端な個人主義は一面であるに留まらない。もしそれが一方で完全なアナキズムを生んだとすれば、他方でそれは個人の絶対主義に傾くのである（Carr 1937, p.438：カー 2013、591 頁）。

以上のように、極端な個人主義と絶対主義を結びつけたカーは、さらに、その独裁的性質について、以下のような批判的検討を著している。

「人類大衆」のためにバクーニンは個人の自由を説き、それをアナキズムの極点にまで推し進めた。革命党のためには彼は「集団組織と行動における個々人の諸意志の絶対的な没却」を望んだ。理論上ではないが、實際上彼は革命党の独裁を二つ返事で自ら引き受けた（Carr 1937, p.438：カー 2013、592 頁）。

カーはこのようにバクーニンの思想的特徴の一面として、個人主義、絶対主義、独裁を強調している。そしてカーはこれを思想的な「混乱」と評している（Carr 1937, p.438：カー 2013、592 頁）。そして、バクーニンはアナキズムの創始者の一人として広く世界に知られているものの、それは共通の理想によってではなく、絶対的な革命的独裁者への完全な服従というつながりによってであるということをカーは強く批判的に指摘している（Carr 1937, p.438：カー 2013、592 頁）。

カー著『バクーニン』の翻訳者であり、「訳者あとがき」をその巻末に寄せている大沢正道はこのようなカーのバクーニン観を「あまりに常識的、露骨に言えばあまりに通俗的である」と評している（大沢 2013、691 頁）。

そして、カーのバクーニン観が「あまりに常識ないしは通俗に落ち込んだ第一歩」として、バクーニンが多なる影響を受けたとカーが主張するスティルナーをカーが

「極端な観念論者で個人主義者」と解釈したことに起因すると大沢は主張する（大沢 2013、691 頁）。

大沢によるとスティルナーは「無政府個人主義」の元祖とみなされることが通説となっている。そのため、カーもそれに従ったのであろうと大沢は推察している（大沢 2013、691 頁）。

ここで重要なのは、ここで用いられている「個人主義」という語が「私的資本主義の基礎ともいえるべき、ブルジョワ個人主義と区別されなくてはならない」という大沢の主張である（大沢 2013、691 頁）。大沢は次のように述べている。

スティルナーの「個人主義」は、われわれがその言葉を聞いてふつうに連想するような、単なる自己主張、個人尊重の思想ではなく、一切の観念—価値体系の否定を媒介とする「創造的虚無」の思想なのである。したがって、誤解を生まぬためには、「個人主義」という用語は用いない方がよいだろう。それはむしろニーチェ的な意味での「ニヒリズム」であり、やはり何と言ってもアナキズムなのである（大沢 2013、692 頁）。

すなわち、大沢によると、スティルナーの個人主義とは、ニーチェ的なニヒリズムと同意語であるというのである。

しかし、ここで想起されなければならないことが、まさにそのニヒリズムこそが、カーが最も忌み嫌った 1930 年代のイギリスに蔓延した精神であったことは、西村 2012 において論証されている（西村 2012）。

そして、カーがイギリスに浸透しているニヒリズムを打破したいと望んだ理由について、ラウアー（Michael Lauer）はカーが「イギリス人の心」のダイナミズムの欠如を確信していたためであると主張している（Lauer 2005）。ラウアーによると、カーは永久に動き続ける世界という感覚をイギリス人は喪失しており、恐怖とおぼろげなノスタルジアだけに根差した「特異な盲目」に陥っていたと考えていたという（Lauer 2005）。

これは、ダイナミズムの欠如についてのカーの批判であることは明らかである。つまり二重性と二元性の対極ある一元的な静的状態に 1930 年代のイギリスが陥っていること、そしてそれをニヒリズムの流布としてカーが解釈していたことの証左である。

したがって、大沢によるスティルナーの「個人主義」の解釈が妥当であれ否であれ、カーがバクーニンの思想に、二重性や二元性を見出せず、一元的で静的な性質である超越的な原理に基づく知識形態に批判的であったことに変わりはないといえる。

以上のように、カーはバクーニンの思想に共感しておらず、先述のように、バクーニンの思想には深い洞察を加えなかった理由として、本節では第一の理由として、個人主義的独裁とニヒリズムについてのカーの主張を検討してきた。

カーはドストエフスキーとの邂逅により、二重性や二元性を非常に有用な思考様式と考えるに至り、反対に静的で一元的なものを、高次への進歩のためには有益ではないと捉えるようになった (Lauer 2005)。

以上のように本節では、カーによる超越的な原理に基づく知識形態に対する批判的な姿勢は個人的独裁と個人主義という用語がどのような意味を持つにせよ、バクーニンの思想を非常に否定的にとらえている個所が存在していることを検討してきた。

以下では、バクーニンによる破壊につぐ破壊こそ、新たな創造に結び付くという考え方に対するカーの批判的な視座を検討することにより、ここにも、一元的かつ静的な超越的な原理に基づく知識形態に対して、カーが忌避観を示しており、批判的であることを立証していく。

2. 破壊と現実主義

本節でもまた、カーが静的かつ絶対性を持つ一元的な思想に批判的であったために、バクーニンの思想に共感できなかった事例を示していく。本節は「破壊と現実主義」の観点から、カーに超越的な原理に基づく知識形態に対して、批判的姿勢が存在することを明らかにしていきたい。

バクーニンは、「破壊をする情熱はまた創造する情熱である」と述べる一方で、カーはバクーニンについての以下のような挿話を『バクーニン』第31章に加えている (Carr 1937, p.440 : カー 2013, 595 頁)。

ある時ライヘルはバクーニンに、もし君が首尾よく君の計画したすべてを實現し、君の夢見た一切を作り出したとしたら、次に何をしようかと質問した (Carr 1937, p.440 : カー 2013, 595 頁)。

カーは、バクーニンの返答として、以下を抜粋している。

その時はすぐに私が、こしらえた一切を取り壊し始めるだろう (Carr 1937, p.440 : カー 2013, 595 頁)。

すなわち、バクーニンにとって破壊は永遠に続くものであることをカーは指摘している。

カーは別の箇所、バクーニンを「夢想家であり予言者であった」と表現している (Carr 1937, p.440: カー 2013、595 頁)。

このようなバクーニンの派手で無法な人格にカーは魅了されていることを感じさせる文章をのこしていても、思想家としてのバクーニンへのカーの評価は、やはり高いものではない。大沢によるバクーニンの人生の解釈と、カーのそれとは著しく異なることを以下に示す。

大沢は以下のように述べている。

彼 (バクーニン) は虚構そのものを徹底的な破壊のかなたに実在 (リアリティ) が存在することを確信して、その追求に生涯をかけたのである。(中略) 数百年、数千年にわたる虚構の破壊が志向されたゆえに、革命が要請されることになったのである。古い虚構を新しい虚構に置き換えるだけですむことならば、問題はそれほど深刻ではない (大沢 2013、704 頁)。

すなわち、膨大な時間をかけて構築された虚構には、徹底的な破壊が必要であり実在 (リアリティ) とは、破壊のかなたにしかありえないというのである。

しかしながらカー著『バクーニン』は、かの有名なユートピアとリアリティの二元論を繰り広げた国際政治学誕生の書籍『危機の二十年』が上梓されたわずか二年前に世に出された著作である。『危機の二十年』では、周知のように、二重性と二元論がその議論の構想の中核にある。以上のことを鑑みると、バクーニンが主張するところの虚構の破壊のかなたにしか、リアリティがありえないという考えは、あまりに一元的過ぎて、カーが共感したとは到底考えられない。

『危機の二十年』において、カーは古いユートピアをリアリズムで以て我々自身で壊したのちには、新しいユートピアを打ち立ていく必要性を繰り返し主張している (Carr 1939)。カーのこの主張は、破壊につぐ破壊の重要性を説くバクーニンやアナキストの思想と全く対極のところにある思想といえる。

また、バクーニンにとって、リアリティを確保するために必要な行動が永遠の破壊であるとして、カーの用いる「リアリティ」という用語とバクーニンの「リアリティ」の語は、全く相いれない概念によって構成されているといえる。

まず、バクーニンにとってのリアリティとは、それがまだ存在せず、目的達成の折に手に入れることのできる、むしろユートピア的な理想である。

それに対して、カーの考えるリアリティもしくはリアリズムとは、「ユートピアニズムの知的理論や倫理的基準が決して絶対的・先験的原則の表現ではない」ということを白日の下に暴露する役割を担うものであり、その有用期間は短い (河村 2021b)。

したがって、カーとバクーニンの「リアリティ」とは全く異なる思想であることを付記しておきたい。

このような検討をしていく中で、次のようなことが見えてきた。

カーは、バクーニンの革命主義に共感しておらず、確かにカーの思想は革命主義とは異なるものである。しかし、伝記『バクーニン』において、革命主義を直接真っ向から否定している箇所も見受けられない。カーは、革命主義もまた、それぞれの時代における知恵として捉えている。そして、それが変化していくことを肯定している。その意味において、カーは、多様性を認めているといえよう。

以上、本節では破壊と現実主義という観点から、カーの思想がバクーニンの思想に対して批判的であったに違いないことを明らかにしてきた。

本章全体を通じては、第一に、カーはバクーニンの思想に共感しておらず、先述のように、バクーニンの思想には深い洞察を加えなかった理由として、本章第一節では、その第一の理由として、個人主義的独裁とニヒリズムについてのカーの主張を検討してきた。

既述のように、カーはドストエフスキーとの邂逅により、二重性や二元性を非常に有用な思考様式と考えるに至り、反対に静的で一元的なものを、高次への進歩のためには有益ではないととらえるようになった。カーにとって静的で一元的な思考様式は、超越的な原理に基づく知識形態と同義である。カーによるこの、超越的な原理に基づく知識形態に対する批判的な姿勢は個人的独裁と個人主義という用語が仮にニーチェ的なニヒリズムの意味を持つにせよ持たないにせよ、バクーニンの思想を非常に否定的にとらえている個所が存在していることを検討してきた。

本章では第二に、破壊につぐ破壊を神格化するバクーニンに対して、カーがそれをあまりに一元的かつ絶対的な原理に基づく知的営為と行動であるととらえていることを指摘した。また、数千年にも及び続いてきた虚構の蓄積を破壊しつくすことこそがリアリティであるという論に対して、カーの使用する「リアリティ」ないし、「リアリズム」と混同してはならないこと、そして、その語句の意味はカーとバクーニンの間に大きな齟齬があることを示した。

以下には、結びとして結語を著し、本稿を総括する。

結語

本稿は、20世紀を代表する英国の思想家、E・H・カーによる第四の伝記作品である『バクーニン』を研究対象とした。先述の通り、この著作は、『ドストエフスキー』、『浪漫的亡命者たち』、そして『カール・マルクス』と続く、一連の伝記群の最終作品であり、国際政治学誕生の書籍と一般的にみなされてきた『危機の二十年』出版

のわずか二年前に上梓された。この時系列的背景は、この作品に大きく影響していることは言うまでもなかろう。

本稿の目的は、伝記『バクーニン』とは、静的かつ絶対的な一元性を有する人間の思考を批判するために書かれた、超越的な原理に基づく知識形態に対する痛烈な批判を具現した著作であることを証明することにあった。

本稿は、1930年代のカーの思想において、一貫性はあるのかという問題関心の下に検討されてきた、拙稿三作（河村 2022a、河村 2022b、河村 2023a）の続編に位置する論考である。既述の本稿の目的を論証することにより、同時に本稿は、1930年代というカーの初期の思想形成期において、超越的な原理に基づく知識形態に対して、批判的視座が一貫して存在していたことを明らかにすることが可能となった。

すなわち、『ドストエフスキー』から『危機の二十年』までの1930年代にカーが著した著作には、一貫性があったのである。それは、人間の思考の相対性と仮設性に着目した、それまで西欧で所与のものとされてきた一元的な絶対性に反対する視座であった。このことは、今後の課題の一端として、次のようなことを挙げることを可能せしめる。

第一に、『ドストエフスキー』から『危機の二十年』までに、超越的な原理に基づく知識形態に対して、批判的な姿勢をとったカーは、より具体的に、何を「肯定するもの」として考えていたのかという点をより明確にしなければならない。

連続した四本の拙稿によって、1930年代には、カーは絶対的な一元性に批判的であったことを論証したが、その事実が、カーの知的営為においてどのような意味を持っていたかを研究する必要がある。

すなわち、その批判的視点が、その後の著作の中で、どのように応用され、議論として展開されているのかを明らかにする必要がある。そのためには、この批判的視座は、逆説的には何を肯定したのかを明らかにし、整理する必要があると思われる。カーが1930年代を通じて批判したものは、明らかにしたが、積極的に擁護したものは何であったかを早急に研究する必要がある。

第二に、カーは普遍的な何かを全く擁護しなかったのか、否かという問題についても研究されるべきである。カーは、明らかに、平和への希求と人類のたゆまない進歩を確信していた。これは、カーの中にある普遍性ということができよう。このことは、カーの思索の中で、超越的な原理に基づく知識形態に対する批判的視座とどのような関係にあると考えられるのであろうか。

この点に関しては、マイケル・ラウアーが、彼の2005年の論考の中で、少しだけ言及している「白紙の小切手」と彼が名付けたカーの思考の型についての、より詳しい研究がなされるべきであると本稿は考える。「白紙の小切手」とは、概念の外枠は決まっているが、概念の内容は常に二重性と弁証法により、変わり続けることがカーの

思考の型といえるのではないのか、というラウアーの指摘である。このラウアーの指摘について、今後検討を重ねていくことも、一つの課題である。

すなわち、カーにおける「平和」や「進歩」というものの概念の外枠は普遍的であっても、その内容は永遠の刷新を繰り返すものであったのではないかという筆者の仮説を、今後明らかにしていきたい。

第三に、カーの1930年代の思想は、ドストエフスキーとの邂逅によって大きな衝撃を受けたことは言うまでもないにしろ、それを西欧と東欧という文化間のインターカルチャーな思想と思想の弁証法的止揚と捉えてよいのかも、今後の研究にとって大変興味深い論点となるのではないと思われる。

なぜなら、もしそうであるならば、国際政治学は、カーの思索によって提唱されたのち、冷戦開始以降は米国主流の理論になったと言ってほぼ差支えがないであろうが、カーの国際政治学観は米国で発展したものと対照して非常に独自のものであることの証左となる。

第四に、そのことは、ドストエフスキー的な「譲歩の精神」であるロシア的な概念、「スミレニー」がカーに与えた影響に関する研究を通じて、極めて平和学的思想と近似する側面をカーの国際政治学が有していたかもしれないという仮説の証明にかかわってくる。

『危機の二十年』やその後に書かれたカーの著作である『平和の条件』（1942）、『西欧を衝くソ連』（1946）、『新しい社会』（1951）に関する研究は膨大にある。伝記作品群を包含するカーの文学的知的営為に関する研究は、まだ始まったばかりと言える。今後とも、カーの文学的研究分野と国際政治学を総合的に研究することにより、カーの意図した国際政治学の独自性を明らかにしていくことの一助を担えれば、筆者にとって望外の喜びである。

参考文献

一次文献

- Carr, E.H. (1931) *Dostoevsky (1821-1881): A New Biography*, London, Allen & Unwin (松村達雄訳『ドストエフスキー』筑摩書房、1968年)。
—(1933) *The Romantic Exiles : A Nineteenth-Century Portrait Gallery*, Victor Gallancz (酒井只男訳『浪漫的亡命者たち』筑摩書房、1953年)。
—(1934) *Karl Marx: A Study in Fanaticism*, London, J. M. Dent & Sons

- (石上良平訳『カール・マルクス』未来社、1956年)。
- (1937) *Michael Bakunin*, London, Macmillan
(大沢正道訳『バクーニン 上・下』現代思潮社、2013年)。
- (1939) *The Twenty Years' Crisis, 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations*, London, Macmillan (原彬久訳『危機の二十年』岩波文庫、2011年)。
- (2000) “An Autobiography”, in Michael Cox (ed.), *E. H. Carr: A Critical Appraisal*, London, Palgrave, pp. xiii-xxii (中嶋毅訳「自伝的覚書」『思想』944、2002年)。
- Karl, M. (1867) *Das Kapital*, Hamburg, Verlag von Otto Meisner (日本共産党中央委員会社会科学研究所監修『新版 資本論』新日本出版社、2019年)。

二次文献

- Cox, M. ed. (2000) *E. H. Carr: A Critical Appraisal*, Basingstoke and New York, Palgrave, 2000.
- Cox, M. (2010) “E. H. Carr and the Crisis of Twentieth- Century Liberalism: Reflections and Lessons,” *Millennium: Journal of International Studies* 38 (May) pp.523-533.
- Davies, R. W. (2000) “Review Essay, *The Vice of Integrity: E. H. Carr 1892-1982*, New York, Verso, 1999,” *The Russian Review*, no.59 (July).
- Fiott, D. (2010) “Carr’s Quest: Escaping the ‘Rules’ of International Relations?” ECPR Graduate Conference、Dublin、Summer 2010.
- Howe, P. (1994) “The Utopian Realism of E. H. Carr,” *Review of International Studies* 20 (July), pp.277-297.
- Johnston, W. (1967) “E. H. Carr’s Theory of International Relations: A critique,” *Journal of Politics* 29 (November), pp.861-884.
- Jones, C. (1998) *E. H. Carr and International Relations: A Duty to Lie*, Cambridge University Press.
- Lauer, M. (2005) “From a Bookshop in Riga: Edward Hallett Carr’s Debt to Fyodor Dostoevsky,” A thesis submitted to the Faculty of Graduate Studies and Research in partial fulfilment of the requirements for the degree of Master of Arts, Institute of political Economy, Carleton University, Ottawa, Ontario.

- Mearsheimer, J. (2005) "E. H. Carr vs. Idealism: The Battle Rages On," *International Relations* 19 (June), pp.139-152.
- Molloy, S. (2003) "Dialectics and Transformation: Exploring the international Theory of E. H. Carr," *International Journal of Politics, Culture and Society* 17 (Winter), pp.279-306.
- Molloy, S. (2006) *The Hidden History of Realism: A Genealogy of politics*, Palgrave.
- Nettlau, M. (1896-1900) *Michael Bakunin Eine Biographie* 3., London.
- Nishimura, K. (2011) "E. H. Carr, Dostoevsky, and the Problem of Irrationality in Modern Europe," *International Relations* 25 (March), pp.45-64
- Wilson, P. (2000) "Carr and his Early Critics: Responses to The Twenty Years' Crisis" in Cox ed. *E. H. Carr: A Critical, Appraisal*, Basingstoke and New York, Palgrave, pp.165-197.
- Wilson, P. (2001) "Radicalism for a Conservative Purpose: The Peculiar Realism of E. H. Carr," *Millennium: Journal of International Studies* 30 (January), pp.123-136.
- 大沢正道 (2013) 「訳者あとがき」E・H・カー著『バクーニン 下』現代思潮新社：679－708 頁。
- 勝田吉太郎 (1979) 『人類の知的遺産 49 : バクーニン』講談社。
- 河村しのぶ (2021a) 「西村邦行著『国際政治学の誕生—E・H・カーと近代の隘路—』に関する一考察」『総合文化学論輯』第 14 号:1－21 頁。
- 河村しのぶ (2021b) 「E・H・カーのリアリズムの起源と『ドストエフスキー』の影響」『総合文化学論輯』第 15 号:1－23 頁。
- 河村しのぶ (2022a) 「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：『ドストエフスキー』と『危機の二十年』の共通点として」『総合文化学論輯』第 16 号：85－109 頁。
- 河村しのぶ (2022b) 「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：『浪漫的亡命者たち』において」『総合文化学論輯』第 17 号：19－41 頁。
- 河村しのぶ (2023a) 「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：カー著伝記『カール・マルクス』における『資本論』に関するカーの議論を基に」『総合文化学論輯』第 18 号：21－41 頁。
- 左近毅 (1973) 「解説」H・M・ピルーモヴァ著『バクーニン伝 下』三一書房：213－255 頁。
- 佐々木隆浩 (2018) 『マルクス 資本論』角川選書。

- 西村邦行 (2010a) 「E. H. カーにおけるヨーロッパ的なものの擁護 1」『法学論叢』第 166 号 5 巻:84-99。
- 西村邦行 (2010b) 「E. H. カーにおけるヨーロッパ的なものの擁護 2」『法学論叢』第 167 号 3 巻:18-139。
- 西村邦行 (2010c) 「知識人としての E. H. カー：初期伝記群と『危機の二十年』の連続性」『国際政治』第 160 号:34-47。
- 西村邦行 (2012) 『国際政治の誕生—E. H. カーと近代の隘路—』昭和堂。
- ハスラム、ジョナサン (2007) 『誠実という悪徳—E. H. カー 1892-1982—』、角田史幸、川口良、中島理暁訳、現代新潮社。
- ピルーモヴァ、H・M (1973) 『バクーニン伝 上』三一書房。
- ピルーモヴァ、H・M (1973) 『バクーニン伝 下』三一書房。
- 森元斎 (2017) 『アナキズム入門』ちくま新書。
- 山中仁美 (2003) 『E・H・カー研究』の現在の状況をめぐって『国際関係学研究』第 29 号:139-147。
- 山中仁美 (2014) 「西村邦行著『国際政治学の誕生：E・H・カーと近代の隘路』」『国際法外交雑誌』第 113 号 3 巻：475-479。
- 山中仁美 (2017) 『戦争と戦争のはざままで』ナカニシヤ出版。

[E. H. Carr's Critical Perspective on Knowledge Forms Based on Transcendental Principles: A Critical Study of the Static Monism in Carr's Biographical Work *Bakunin*].

[KAWAMURA, Shinobu・元九州大学大学院法学府博士後期課程・日本翻訳連盟認定翻訳士、産業翻訳事務所代表・現在の研究テーマ：E・H・カーの国際政治思想]。